



螺鈿小物箱

貝殻を磨いて薄くしたものを貼り付けて文様が描かれている。箱前面の板を上引き抜くと引き出しが現れる。江戸期から昭和まで、代々夫人に受け継がれた小物箱。



手桶形水桶

茶道具とみられる内外とも黒漆塗りの蓋付き容器。山崎家には天保12年(1841)に建てられた茶室があり、四代喜兵衛や六代喜兵衛は茶道具を収集したという。



長柄銚子

全面に唐草文様をあしらった、柄のついた片口の蓋付き容器。酒を盃に注ぐのに使う道具。雛人形の三人官女の持ちものとしてなじみのある銅製の長柄銚子が多い。



玉目膳

たまめく
玉目とは、ケヤキなどを製材した時に現れた木目が、渦巻き状になっているものをいう。この自然に出た模様を活かして、透き漆をかけて仕上げた膳。



網目文朱塗鉢 / 縁起のいい網目文様の美しい蓋付きの器。サイズは口径24.0 cm、高さ15.0 cm。

山崎家は寛延3年(1750)に本家から独立し、農業のかたわら質屋を開業したことに始まります。やがて醤油醸造を始め、中野村や千駄木に支店を出すなど、江戸近郊の有力な商家となりました。江古田村の中でも三代喜兵衛以降、代々名主を務めました。山崎家に伝わった江戸時代後期から昭和時代にかけての品々の中から、名主家の暮らしぶりを物語る漆器の数々を紹介します。



菊水文吸物椀

文政9年(1826)に購入されたもので、20客用意されている。山崎家では、客をもてなす際には、江戸の料理屋から調理人を数名頼み、自宅の台所で調理してもらっていたという。



唐草橘紋重箱

唐草の中に山崎家の家紋である橘紋が描かれている。サイズは18.3×16.8 cm、高さ28.5 cmで、五段重ねの重箱。



朱塗鉢

松、梅、鶴のめでたい図柄が描かれた色鮮やかな、蓋付きの木鉢。サイズは口径23.5 cm、高さ8.0 cm。



挟箱

蓋の内側に万延2年(1861)と墨書きがある。衣類などを入れ、棒を通して担いで運んだ。薄くした板や竹を組み、布や和紙を張り、漆を塗って固めて作られたもので、軽量である。



朱塗化粧箱

六代喜兵衛の清夫人の愛用品。小引き出しには、お歯黒筆、印章が入っていた。箱の蓋の裏に鏡がついている。ガラス鏡であるが鏡立のような脚を組み立てて乗せる構造になっている。



菊花蒔絵文箱

文箱は書状を入れて差し出す細長い箱で、状箱ともよばれる。サイズは縦24.5 cm、横7.9 cm、高さ5.7 cm。かぶせ蓋で、側面の環に紐をつけ、蓋の上で結んだ。



松葉文小皿(左)、草花文小皿(右)

根引松と連鶴が描かれた小皿は6枚。サイズは直径11.2 cm、高さ3.0 cm。桜の描かれた小皿は19枚ある。サイズは直径11.0 cm、高さ3.0 cm。



鯉桶

江古田は海が遠いので、お祝い事には鯛でなく鯉を用いたという。その鯉を運ぶのに使われた桶を雛道具に仕立てた物。山崎家の雛段に飾られるが、他では見られない貴重な品。